

厚生科学研究費補助金
エイズ対策研究事業

**“性感染症としての HIV 感染” 予防のための市民啓発を、
各種情報メディアを通して具体的に実施実行する研究計画**

平成 13 年度 総括・分担研究報告書

主任研究者 熊本 悦明

平成 14 (2002) 年 3 月

目 次

I. 総括研究報告

- “性感染症としての HIV 感染” 予防のための市民啓発を、各種情報メディア
を通して具体的に実施実行する研究計画 1
- 熊本悦明
- (資料) 1. 性感染症についてのアンケート用紙及びその集計結果 16
2. 図. 高校生性経験率 (北海道調査: 2000~2001 年度) 17
3. 別刷. 林 謙治, 他: 北海道の一地方都市 (苫小牧市) の高校生の性意識、
性行動に関する調査の検討」 22
4. 福岡県性教育研究会調査アンケート結果 34
5. 雑誌「Ray」別刷 38

II. 分担研究報告

1. 一般雑誌における STD 関連記事の傾向と、性関連記事の若者への影響と
ニーズに関する研究 43
- 堀口雅子, 他
- (資料) 1. 野々山未希子, 他: 一般雑誌における STD 関連記事の傾向 (第 1 報),
日本性感染症学会誌, Vol.12 No.1: 84-90, 2001 年 7 月 46
2. HIV 感染症予防のための啓発活動を目指して、雑誌の内容を分析する研究 53
- 石川弘義
- (資料) 1. 雑誌分析結果図表 61
3. 一般学生におけるクラミジア感染の実態調査研究 70
- 今井博久
- (資料) 性活動に関する健康調査分析結果図表及び質問票 74

III. 研究成果の刊行に関する一覧表 83

IV. 研究成果の刊行物・別刷

1. 日本の性感染流行の現状 89
2. 日本における性感染症の流行
—若い女性を中心としたクラミジア感染症大流行の実態— 97
3. 膣分泌物自己採取法による *Chlamydia Trachomatis* のスクリーニングと
性行動との関連性 109

4. 臨床医学の展望 性感染症学	122
V. エイズ対策研究推進事業	
研究成果等普及啓発事業（福岡、横浜の STD/HIV 市民公開講座結果報告）	125

I. 総括研究報告

厚生科学研究費補助金（エイズ対策研究事業）

総括研究報告書

“性感染症としての HIV 感染” 予防のための市民啓発を、
各種情報メディアを通して具体的に実施実行する研究計画

主任研究者 熊本 悦明 （財）性の健康医学財団会頭

研究要旨

わが国も最近性感染症としての HIV 感染の広がりが少ないとは言いながら、急速に拡大しつつある。

その危機的状況を醸成している原因として、わが国では、国際的に活躍している Family Health International が強調している① “HIV 予防と STD 予防の strategic overlap”，② “media alliance”，③ “condom promotion” の 3 点が具体的な公衆衛生行政の中で非常に欠けていることが挙げられている。

そこで、我々は、その問題を社会疫学的、また医学的に分析し、現状の問題点を探り、今後のよりよい対応等を検討すべく研究を進めている。

本年度で明らかにし得た所をまとめると、次の如くなる。

- ① 一般市民の STD/HIV 感染に対する警戒心がかなり低い。
- ② STD/HIV 感染流行の追い風となっている性生活動態の検討を大学生に行ったところ、性行動の活発化、多様化がかなり進んでおり、多様化が進む程、無症候性の性感染症であるクラミジア感染率は高くなっている。
- ③ STD/HIV 感染について、一応の知識を持っていても、実際の性交渉の現場でのコンドーム使用が必ずしも結びつかず、無自覚のうちにクラミジアを感染してしまっている若者が少なくない
- ④ 一般の若者たちが得ている STD/HIV 感染、さらには性に関する情報の入手は、比較的身近な人々からというものが多いが、本人自身が、情報メディアからの情報を入力しているものが多い。しかも、若者が情報を得ている身近な人々の入手源も、やはり殆ど情報メディアからであるわけで、情報メディアのもつ影響力の大きさはかなり絶大である。

ところが、その情報メディアの“性”や“STD/HIV 感染”に対する姿勢が問題で、性を楽しいエロスとして捉える興味本位の傾向がかなり強い。特に男性誌はその傾向が目立ち、女性誌も編集責任者が殆ど男性であることから、全体として STD/HIV 感染の危機感を高めることは、興味ある性を抑制することにつながるとして敬遠されがちである。そこに、エイズ/HIV 感染への恐さが忘れられ、無関心傾向を助

長させている原因があるといつてよい。

- ⑤ そのように、情報メディアの流した STD/HIV 感染に関する情報が甘いため、わが国における STD/HIV 感染の感染率は、最近ことに上昇傾向が目立っている。今後、情報メディアからの警告の仕方、情報内容につき、かなり具体的な分析検討を行い、より効果的な情報メディアによる情報の流し方を研究して行かねばならないことが痛感させられている。

分担研究者：

島崎 継雄（日本性科学情報センター）
行天 良雄（国際医療福祉大学）
小谷 直道（読売新聞社東京本社）
大熊由紀子（大阪大学大学院）
南谷 幹夫（東京都立駒込病院）
川名 尚（帝京大学医学部附属溝口病院）
木原 正博（京都大学大学院）

A. 研究目的

わが国では、性感染症としてのエイズ/HIV 感染例は比較的少ないというのが、未だに一般市民の理解といつてよい。

しかし、統計的には少ないながら急上昇傾向にあり、ことに近隣アジア諸国の大きな流行の影響も受けて、極めて近い将来、大きな流行が始まる可能性が危惧されている。

その危惧の最大のポイントは、HIV 感染への易感染性を強く高めるとされている classical STD（ことにクラミジアや淋菌感染症など）の“性生活上の生活環境汚染的大流行”がありながら、一般市民があまりエイズ/HIV 感染への危機感が極めて低いことである。それは“何故？”が問題となる。

国際的に活躍している Family Health International で最近強調しているように、“A：STD 予防と HIV 予防と strategic overlap”，“B：condom promotion”，“C：media alliance”が必須であるのに、その点、わが国でこの三つのキー・ファクターが極めて公衆衛生行政上欠けているといつて過言ではない。

そこでわが国でその A, B, C がどの程度の状態にあり、そこにどのような問題点があり、また、どのように改善していくべきかを検討することを目的に、この研究計画が立案されたわけである。

B. 研究方法

1) [“STD/HIV 感染に対する警戒心が一般市民の間に現在どれほどあるのか”の検討]

公開講座や啓蒙講義などの折、一般市民の聴衆や学生に対し STD/HIV に関するアンケート調査を行い、STD/HIV に関する認識度や危機感を分析する。

2) [“STD/HIV 感染流行の追い風となっている若者の性生活動態”とその多様化によるクラミジア感染率との関連性の検討]

主として高校・大学での調査を中心に、若者の性生活の活発度や多様化・交錯性の調査分析を行う。同時に、自発的に提出された尿を用いて大学生の性行動活性度と具体的な別々のクラミジア感染度を比較検討する。

3) [“STD/HIV 感染に関する知識がどのくらい具体的な性感染症予防行動に結びついているか”の検討]

STD/HIV に関する認識不足が感染予防行為を不十分にすることは予想されるころではあるが、さらに問題なのは、一応知識としてはかなり持ちながらも、現実には実際の性交渉の

場面で具体的予防行動に結びつかない可能性が高い。その点を検討するため、医学知識のある看護学生の協力を得て、自己採取膣スミアで現実にクラミジア感染ありやなしやと、感染危機意識との関連性を検討した。

4) [“若者たちの性関連情報入手における情報メディアの役割”の検討]

若者たちが実際にどのような方法で性関連の情報を入手しているか、また、どのような情報を求めているか、STD/HIVに関する認識形成について、情報メディアがどのような位置を占めているかを検討する。さらには、その情報を送る側の編集者側がどの程度STD/HIV感染流行に対し問題意識を持ち、また自らの社会的役割を認識しているかなどについての調査検討を行う。

現在情報メディアから流されているSTD/HIV感染に関する情報内容について分析を行う。さらに、読者である学生や情報作製者側の男性用及び女性用雑誌編集者に直接インタビューを行い、調査する。

5) [“わが国の性感染症/HIV流行のここ10年の推移と情報メディアの流している情報の内容との関連性”の分析]

男性向けジャーナル(週刊アサヒ芸能、週刊現代、週刊ポスト、Hot-Dog Press)、女性向けジャーナル(女性自身、女性セブン、an/an、婦人公論)を選び、STD/HIV感染関連記事(薬害エイズ問題の記事は除外)を対象に、情報内容と性感染症流行の動向との関連性について分析検討した。

その検討年次は、わが国のSTD(ことにクラミジア及び淋菌感染症)の罹患率の動向との関連性を検討するため、STD流行の上昇傾向のあった1988年、減少傾向の始まった1991年、減少傾向の底をついた1995年、上昇傾向

が目立ち始めた1999年につき分析を行なった。

6) [“情報メディアを通じて正確な警告的STD/HIV感染情報を届けると、どの程度読者からの具体的な反応が出、かつ実際の検査治療へ結びつけられるか”]の検討

主婦の友社発刊若い女性向の“Ray”誌上にクラミジア感染に関する啓発記事を掲載し、それへの読者の反応と、実際に検査のための医学機関受診率などを調査した。

C. 研究結果

(1) [STD/HIV感染に対する警戒心がどの程度一般市民に浸透しているか]

a. 小学・中学・高校における保健体育の教科書におけるSTD/HIV感染に関する記述の検討

小学校3～5年用：5種、同5～6年用：5種、中学校用：3種、高校用4種及び文部科学省“学校における性教育の考え方・進め方”につき、性感染症/HIV感染症/エイズに関する記述及び予防意識啓発度につき検討してみた。教科書全体が性、特に性交に対する記述が極めて漠然とぼかされているため、性感染症や性感染症としてのHIV感染の記述が極めて不十分で、性教育の現場における性感染症/HIV感染への警戒心啓発度は非常に低い。ことにコンドームに関する記載はなく、学校性教育における性感染症/HIV感染関連の教育の不徹底は驚くほどである。しかもエイズを人権問題としての記載が目立ち、肝心な性感染症としての警告が殆どなく、わが国の“性教育のおくれ”のひどさを痛感させられた。

b. 小・中学生のエイズ/HIV感染の認識度

福岡県性教育研究会に依頼、協力により得られた調査では、小学・中学の低学年で

は半数近くもエイズを知らないという成績である。ただ、高校での調査では8割強、知識としてもっていた。

これは小・中学校では、エイズの人権問題の取り上げが、大分世の中の流れの中で下火になってきたこと、またエイズが性感染症問題であることがはっきりしてきて、小・中学で性問題が敬遠されることなど、と連動して、教育現場でのエイズ教育が積極的に行われなくなったことによる。高校では、まだエイズという名は知っているが、STD としての問題意識はかなり低い。

c. STD 公開講座時の聴衆アンケート調査による一般市民のSTD/HIV 感染認識度

STD 公開講座来会者の殆どは、医師、保健、看護などの医療関係者以外の人々ではSTD に関心ある成人、ことに性教育に関係のある養護教諭が多いにも拘らず、5人に1人はエイズは性感染症であるという認識がなく、また現在流行のSTD が無症候感染が多いなどの認識がないものが4人に1人はいるという調査データになっている。

これほど、STD/エイズ情報が新聞・雑誌・テレビなどで流されているにも拘らず、STD/エイズに関する認識が市民の間に徹底していないことは注目すべきことといえてよい。

(2) 若者の性生活動態の多様化とクラミジア感染率

a. 中学・高校生における性経験率

この種の報告は、現在までかなりの数に上り、ことに東京都性教育協力会の報告で、最近高校3年生の女子生徒が男子生徒を経験率が上回り、40%に達することが社会的に関心が持たれている。

しかし、この種のデータにはかなり集計

上問題がある。具体的なデータを詳細に検討すると、現在の全国的な若者の性の解放傾向は都会、地方の差はさしてなく、むしろ進学・受験の生活規制の強弱による差が大きく、性の自由化の進み方に学校差をつけている。

高校1年生の性経験率でさえ、進学校では10%前後なのに、進学に関係のない私立校では30%にも達していることから、生活環境がかなり大きく性経験率に影響を与えている。

b. 性経験の多様化とクラミジア感染率

宮崎県下の大学生984例の調査で、性経験率 男81.2%、女74.2%であったが、5名以上のセックス・パートナーを持ったものが、男で全体の27.6%、女で24.8%と、大学生の約3/4は性経験を持ち、1/4は5人以上の経験者であるという、地方県でさえもこれほどの性の自由化の著しさがあることが示されている。

そして、セックス・パートナー数が多くなるほどクラミジア陽性率が高くなっている。男女で比較すると、セックス・パートナーが1人(2.5%, 3.2%)、2人(6.7%, 5.6%)、3人(6.9%, 8.7%)、4人(5.6%, 22.5%)、5人以上(11.1%, 12.3%)となっており、同じセックス・パートナー数でも、すべてで女子の方が陽性率が高いことがわかる。

逆の立場からクラミジア陽性群のセックス・パートナー数を陰性例と比較してみると、看護学生の調査であるが、10歳台の陽性群はセックス・パートナー数が平均5.1人、陰性群は2.0人で有意に差があった。10歳台陽性例の57%はセックス・パートナーが5人以上となっている。

いずれにせよ、性行動の活発度と STD 罹患率とがかなり比例することが示されている。

ただ、これら症例をコンドーム使用率で分類し直すと、コンドーム不使用群男女とも 14~15%、性交途中から使用群 4~5%、性交始めからの使用群 0%となっており、コンドームの正しい使用が、感染率にかなりの確かな影響を持っている。

この点が STD/HIV 予防啓蒙上の重大なポイントとあって過言ではない。

(3)〔STD/HIV 感染の知識と実際の STD 予防行動との関連性〕

看護学生という、一応の医学的知識があり、STD に関する認識もあると推定される 10 歳台女子についてのクラミジア感染率を調査すると、性経験者で 6.7%となっている。しかもそれら陽性例の 75%は自らの感染の可能性は低いと認識している。

STD に関する知識もあり、感染するような無防備の性交渉を持ちながら、具体的にコンドーム使用による STD 予防行動をとらなかったために、クラミジア感染してしまっているわけで、現実の性交渉の場で知識が行動に結びつかなかったことを意味しているわけで、どのような問題が知識—実際の予防行動との間のリンケージをブロックするものなのか、STD 予防コンドーム使用キャンペーン上、心理的問題に絡む重要な研究テーマといえよう。

(4)〔若者たちの性関連情報や STD/HIV 感染に関する情報を入手する場合の情報メディアの役割〕

以上のように、STD/HIV 感染の知識が、具体的な予防行動に結びつきがたいことは現実にあるにせよ、(2) 項で述べた如く、

正しいコンドーム使用実施例では感染率 0%という知見もあり、STD/HIV 感染の問題点や予防法に関する的確な情報を一般市民に可能な限り流すにしくはない。

D. 考察

1) STD/HIV 感染の知識とそれへの警戒心・危機感

現在、性教育の現場へ医学界から流されている STD/HIV 感染に関する情報は、かなり不完全であり、それへの正しい知識や警戒心を創り上げる役割に欠けていることが目立つ。

学校教育では HIV は未だに性感染症問題としてでなく、人権問題として取り上げられている傾向が強い。そのため、一応学生・生徒は知識として HIV を知っているものの、性感染症としての認識は低く、まして従来からの性感染症との関連性に関する知識は極めて低く、予防意識が生まれていない。

しかも最近、エイズの薬害エイズとの関係の話題性が低くなりつつあるのを反映し、学校教育からエイズ問題の取り上げ方が少なくなっている。福岡県性教育協会に依頼した調査では、小中学生などの低学年では半分近くも“エイズ”を知らないという成績も出ており、全体として“性感染としてのエイズ/HIV 感染”の正しい認識の国民全体への認識徹底が強く求められるところと考える。

また、一般市民への情報メディアから流されている情報もやはりその傾向が強く、医学関係者以外では、今でも HIV 感染が性感染症であるという認識の徹底がかなり不十分である。他の STD がエイズ/HIV 感染とが容易に結びつくこと、そしてその従来からの STD/クラミジアなどが大流行していて、それは今や性生活の環境汚染的状况にあるまでになっているという

認識が極めて不徹底である。

2) 若者における性行動の活発化傾向

中学・高校・大学生を中心とした若者、ことに10歳代の性行動については、各方面で検討され、報告されているが、比較的平均化された経験率で論ぜられている傾向が強い。

しかし実際は同じ学年の高校生の性経験率をとってみても、学校の性格や進学校の性格など、進学との関連性により、生徒の“性の開放感”の広がりにかなり大きな差がある。それを反映して性経験率にもバラツキが多く、学校間に大差があることが我々の調査で示されている。例えば高1年女子で11~42%、高3女子で45~72%と、かなりな幅広いバラツキがある。そのため実際の性教育の場において、そのバラツキを十分考慮した性教育内容を考え、指導していくことが望まれる所である。

その点の整理がされていないことが明らかであり、今後の教育界における中学・高校の性教育現場での“ピル・コンドーム”教育の指導方針議論の鍵がそこにあるといえよう。

大学生（1984名調査）での調査で性経験率は男性71%、女性74%であったが、そのうち、クラミジア感染率が（パートナー1人）群では男性2.5%、女性3.2%であるのに対し、（パートナー5人以上）群では男性11%、女性12%と、その性生活内容によりSTD感染率も大きな差があることが明示されている。

若い人々へのSTD関連情報の伝達が、彼らの生活の実態に結びついて、具体的な予防行動・コンドーム使用行動に実際に結びつくには、どのような情報内容が求められるのかを今後検討しなければならないと考える。

コンドームをセックスの初めからきちんと使用している群ではクラミジア感染率は0であるという成績を重視しなければならない。

3) STD/HIV 感染に関する知識がどの程度具体的な各個人の STD 予防行動に結びつくかの検討

一応のSTD/HIV感染の知識が一般常識より高いと考えられる看護学生での我々の調査で、“クラミジアに無症候感染をしている症例群”と“感染していない症例群”とで、“自らの性生活がクラミジア感染の可能性が高いこととする割合”を比較すると、感染群で14.3%、非感染群で26.5%となっており、感染群の方がむしろ自らの性生活での無症候感染の可能性は低いと信じている。しかも“決まったパートナーである”、“クラミジア感染を持っていると思われる相手を持っていない”、“いつもコンドームをつけている”などというアンケート調査回答をしている。看護学生として一般女子学生よりは一応のSTD感染への常識的認識をより多く持っているはずなのに、その知識がこのように正しいコンドーム使用による性感染症予防行動に結びつかないことが、感染の有無という具体的な医学的検査データから明らかに示されている。

このことは、性交渉の実際的な場面における人間性の弱さだけでなく、STD/HIV感染の本当の深刻さを植えつける程の詳しい情報をやはり得ていなかったことにもかなり原因があると考えられる。STD/HIV感染の深刻さに関する知識の甘さが根底にあるといえよう。

4) 若者たちの現在得ている STD/HIV 関連情報は、どのようなもので、どのように入手しているか

我々の調査では、知人・友人、またはセックス・パートナーからの“個人的情報”が知識入手の重要な部分を占めている。しかし、別のSTD/HIV感染情報として、学校における性教育や医学関係図書や、若者の愛読する週刊ジャ

ーナルや、テレビなどから得たものもかなりあることが明らかである。ことに若者向けの情報ジャーナルはよく読まれており、それがかなりSTD/HIV 感染に関する知識源や、また予防行動源になっており、そのもつ影響力が如何に強いかが示唆されている。

しかし、そのメディアからの情報は、男性誌と女性誌ではかなりな差がある。男性誌は“性をエロスという視点”で捉え、STD 予防などよりは、むしろSTD/HIV 感染への危機感や性欲減退につながると、性感染症／エイズ情報は敬遠されている傾向にある。それでも、女性誌の方は一応セックスを楽しむには正しい知識が必要などという立場で書かれていることが少なくない。しかし、いずれにせよ、日本の一般雑誌の編集責任者が殆ど男性であるためか、性に関する情報が興味本位の男性視点からの内容になってしまっていることが多い。医学的に正確な、ことに感染予防に結びつく危機意識につながるような情報が少ないことが問題であるといえる。これをどのように啓発するかが重大な問題点といえる。

5) 男性向及び女性向ジャーナルにおけるSTD/HIV 感染に関する情報の年次変遷と、STD 流行の流れの検討

各種ジャーナルのSTD/HIV 関連記事について分析したところ、STD/HIV 感染情報を因子分析すると、a) 性的興味の追求、b) STD の知識伝達、c) 興味本位の性行動への警告・抑制情報、d) STD 感染のパートナーへの責任追及、の4因子に分けられる。

男性向けジャーナルは、a) 性的追求パターンがかなり優位であり、予防行動に結びつく情報よりアジテート的な性情報が先行することが問題点と言えよう。

男性は、情報ジャーナルの抑制的性情報には

あまり影響を受けずに、性的追求パターンのアジテーションに乗って自由に活発に性行動を行い、この結果としてSTD 流行が上昇の方向に動いてしまっているように見える。男性に対する性感染予防のための情報は、如何なる情報が必要かを公衆衛生学的分析する必要があり、今後の大きな課題といえよう。

女性向けジャーナルではSTD の知識関連や抑制的な情報がかかなり優位であるにもかかわらず無症候感染率が高いことは、女性の性に対する対応が男性への受身的ニュアンスが強いこととの関連性があると考えられる。

ただ、STD 流行年次的推移とのSTD 情報との関連性で、男性向けジャーナルはあまり関連性が示唆されていないが、女性ジャーナルは、葉害エイズ熱が冷め、STD/HIV 感染の警戒心が緩みSTD 流行上昇が再燃する直前の1995年に、性行動抑制及びSTD 感染知識関連の情報記事がかかなり少なくなっていた。その抑制的情報の緩みが、性に受身的な立場にあるとはいえ、予防行動が減り、その後のSTD 流行上昇に結びついたものと推定される。

6) 情報メディアを通じての正確なSTD/HIV 情報への反応調査

主婦の友社発刊の若い女性向けジャーナル“Ray”にクラミジア感染問題の見聞き啓発記事を出し、その記事に読者がどのように反応するかを調査した。

発行部数が多い割に、読者からの、心配して、より詳しい情報が欲しいというアプローチは僅か1,217件しかなかった。深刻に受け止めさせることが難しいことがわかる。しかも、アプローチして来た若い女性群の中でアンケート調査に答えた読者は81名のみであった。情報メディアを通じても、一般社会人への医学的な、具体的なアプローチが難しいことがわかる。

ただ、医師受診調査解答者の 41.3%が心配になり医師を受診しているとしており、このような情報メディアによる啓発手段が、僅かずつでも地についた STD 予防治療に結びついていく可能性があることが示されている。

一般若者市民への情報ジャーナルからの啓蒙アプローチを、今後もさらに同様な試行錯誤しながら、啓発手段を考えつつ、実施していきたいと考えている。

E. 結論

STD 感染は今や“まさに性生活上の生活環境汚染の様相”で広がりを見せ、その流行の波に乗って HIV 感染もひそかに一般市民層の中に浸透しつつある。この状況に対し、専門家の間ではかなり危機感が高まっている。

ところが、我々の調査では、一般市民は STD/HIV 感染にはかなり関心が低く、性の解放を無防備の性交渉のうちにエンジョイしているといつてよい。それは、市民、ことに若い人たちに影響力の強い情報メディアが、未だその STD/HIV 流行の危機に目覚めておらず、むしろ甘く性を楽しむことを強く勧めるが如き情報を多く流している。この社会的な STD/HIV 感染に対する楽観状況を情報メディアを協調させながら如何に改善していくかが、今後の大きな問題点といえる。しかし、国際的にも STD/HIV 感染予防啓発には情報メディアの協力の必要性が強調されており、わが国での情報メディアへの医学側からのアプローチは必須である。

やはり情報メディアを通じての社会啓蒙に努めねばならないし、それとともに、正しい、かつ警戒心を作り出すべき情報を流す情報メディア記者や編集者に、しっかりした予防行動に結びつくような情報を書くべく意識改革さ

せるには如何にすべきかも大きな研究課題と考える。**情報メディアとのアライアンス**この点のわが国のおくれを痛感する所である。

いずれにしても、正しく、しっかりとコンドームを使用する、積極的な性感染症予防意識、すなわち具体的な行動に結びつく意識を社会的に作り出していかなければならない。

大学生の調査で、クラミジア感染率がコンドームを使用していない群が男女とも 14~15%だが、コンドームを使用した群、初めから使用しなかった群でも 4~5%に迫り、クラミジア感染例が少なくない所が、性交渉の初めから正しくコンドームを使用していたグループは、クラミジア感染率 0 という事実を踏まえて、啓蒙を徹底させていく必要があることを痛感している。

具体的な性感染予防としてのコンドーム使用に関する問題点は、性感染症に対する一応の問題意識を持っていても、それが具体的な自己防衛行動に実際に結びつかない、個人主義的な自己尊厳意識の欠如が最終的なコンドーム使用実行の鍵的問題点となっている。予防意識をさらに自分を守る強い意志にまで固定させるには、如何にすべきか問われてくる。この点の学校での性教育、社会に対する情報メディアの活動が、これからの STD/HIV 感染予防の最も重要な課題といえる。

F. 健康危険情報

なし。

G. 研究発表

1. 論文発表

(1) 熊本悦明：日本における性感染症の現状 アニムス：6 (2)：33-38：2001.

(2) 熊本悦明：性感染症学 日本醫事新

報：4022:1-8：2001.

- (3) 熊本悦明ら：日本における性感染症の流行：総合臨床 50 (10)：2676-2685：2001.
- (4) 齋藤益子ら：腔分泌物自己採取法による *Chlamydia Trachomatis* のスクリーニングと性行動との関連性－東京都内の看護学生を対象として－. 日性感染症会誌, 12 (1)：136-140, 2001.

2. 学会発表

- (1) 熊本悦明, 女性優位の STD 時代－無症候性性感染症の現状を考える, 第 53 回日本産婦人科学会総会, 教育ランチョンセミナー, 2001 年 5 月 (札幌市)
- (2) 熊本悦明, 日本における STD 流行の問題点, 国際 Andrology 学会, 2001 年 6 月, (モントリオール)
- (3) 熊本悦明, この性感染症流行の現状を直視してほしい, エイズ学会・性感染症学会合同公開講座, 2001 年 12 月, (東京)

3. 成果発表会

- (1) STD/HIV 市民公開講座「若者と性の健康」, 2002 年 1 月 (福岡市)
- (2) STD/HIV 市民講座「若者と性の健康」, 2002 年 3 月 (横浜市)

H. 知的財産権の出願・登録状況

- 1. 特許取得 なし
- 2. 実用新案登録 なし
- 3. その他 なし

＜性感染症についてのアンケート＞

性の健康医学財団では、性感染症が最近いろいろ問題を起こしておりますので、このようなパンフレットを作りました。そこで、皆様が性感染症についてどの程度知っておられたか、また性感染症についてのご意見を伺いたく、アンケート調査を行っております。これからの啓発活動に大変参考になりますので、是非ご記入いただきたく、ご協力の程お願い申し上げます。

＜ご年令＞	才	＜性別＞	男	女	ご職業
＜結婚＞	している		していない		

<1> 知っている性感染症の名前に○をつけてください。

- | | | |
|-----------|-------------|-------------|
| a. 梅毒 | b. 淋菌感染症 | c. クラミジア感染症 |
| d. 性器ヘルペス | e. 尖形コンジローム | f. トリコモナス |

<2> 今までにかかった性感染症がありますか。かかったとしたら下記のどれですか。

○をつけてください（2つ以上でも○をつけてください）。

- | | | |
|-----------|-------------|-------------|
| a. 梅毒 | b. 淋菌感染症 | c. クラミジア感染症 |
| d. 性器ヘルペス | e. 尖形コンジローム | f. トリコモナス |

<3> 性感染症について、次のことで正しいと思われるものに○をつけてください。

- a. 今流行している性感染症は、あまり症状が出ないものが多い。
- b. エイズは性感染症である。
- c. 上記の<1>に書いたような性感染症にかかっていると、エイズに3倍も4倍もかかりやすい。
- d. 子宮頸癌も、性感染症であるヒト乳頭腫ウイルス感染と極めて深い関係がある。
- e. クラミジア感染症が若い女性の間で大流行している。
- f. クラミジア感染症には性生活をもっている人は誰がかかってもおかしくない。
- g. クラミジア感染症になると不妊症や流・早産になりやすい。

<4> コンドームは何のために使いますか。

- | | | |
|----------|--------------|----------|
| a. 避妊のため | b. 性感染症予防のため | c. 両方のため |
|----------|--------------|----------|

<5> コンドームの使い方。

- | | | | | |
|---|------------------|-----|----|--------|
| { | a. 決まったパートナーの時は、 | いつも | 時々 | 使っていない |
| | b. 不特定のパートナーの時は、 | いつも | 時々 | 使っていない |

<6> コンドームを使う場合、性交渉のどの時点から使ってますか。（書きにくいかも知れませんが、是非書いてください。）

- | | | |
|----------------|-----------------|----------|
| a. 始めから（口の時から） | b. 始めから（性器接触から） | c. 射精直前に |
|----------------|-----------------|----------|

<7> ご意見があれば、是非お書きいただければ幸いです。

ご協力ありがとうございました。

厚生科学研究：STD/HIVの情報分析研究班（班長 熊本悦明）

＜性感染症についてのアンケート集計＞

○年齢 (人)

年齢	～24歳	25～29歳	30～34歳	35～39歳	40歳以上	NA	合計
全体	123	36	44	25	216	19	463
医療関係者	5	13	11	11	45	1	93
その他の職業	116	22	23	13	135	6	315
NA	2	1	3	1	36	12	55

○性別 (人)

年齢 性別	39歳以下			40歳以上			合計
	男	女	NA	男	女	NA	
全体	54	174	0	30	185	1	216
医療関係者	8	39	0	9	36	0	45
その他の職業	46	128	0	19	115	1	135
NA	0	7	0	2	34	0	7

○職業

職業	39歳以下		40歳以上		合計
	人	人	人	人	
医師	3			11	
看護師・看護士	7			12	
助産婦	4			5	
薬剤師	1			1	
保健婦(保健所職員)	26			15	
医学生	2			0	
病院勤務	1			0	
その他の医療関係者	3			2	46
全社員・役員	13	47	11		
学生	116		1		
教員	10		33		
研究員	1		0		
公務員	14		18		
自由・サービ	1		2		
養護教諭	15		50		
フリーター	2		0		
主婦・家事手伝	1		14		
農業	0		5		
その他(相談員)	0		3		
無職	1	174	4		141
無回答	7		48		
計	228		235		

○既婚・未婚

	結婚		合計
	している	していない	
39歳以下	61	162	228
全体	25	21	47
医療関係者	34	136	174
その他の職業	2	5	7
NA	198	13	216
40歳以上	43	2	45
全体	122	8	135
医療関係者	33	3	36
その他の職業	12	2	19
NA	5	0	5
医療関係者	5	1	6
その他の職業	6	1	7
NA	1	5	6

<1> 知っている性感染症の名前に○をつけてください(複数回答)

39歳以下	性別	職業	a.	b.	c.	d.	e.	f.	合計	NA
			梅毒	淋菌感染症	クラミジア感染症	性器ヘルペス	尖形コンジローム	トリコモナス		
男		医療関係者(8)	7 100.0%	7 100.0%	6 85.7%	6 85.7%	6 85.7%	5 71.4%	37	1
		その他の職業(46)	46 100.0%	43 93.5%	44 95.7%	40 87.0%	35 76.1%	36 78.3%	244	0
女		医療関係者(39)	39 100.0%	39 100.0%	39 100.0%	39 100.0%	39 100.0%	39 100.0%	234	0
		その他の職業(128)	124 97.6%	117 92.1%	126 99.2%	116 91.3%	107 84.3%	107 84.3%	697	1
40歳以上	男	医療関係者(9)	9 100.0%	9 100.0%	9 100.0%	9 100.0%	9 100.0%	9 100.0%	54	0
		その他の職業(19)	19 100.0%	17 89.5%	19 100.0%	17 89.5%	12 63.2%	14 73.7%	98	0
女		医療関係者(36)	36 100.0%	35 97.2%	35 97.2%	36 92.3%	32 88.9%	35 97.2%	209	0
		その他の職業(115)	114 100.0%	101 88.6%	104 91.2%	90 78.9%	65 57.0%	92 80.7%	566	1

<2> 今までにかかった性感染症がありますか(複数回答)

39歳以下	性別	職業	a.	b.	c.	d.	e.	f.	合計	合計		
			梅毒	淋菌感染症	クラミジア感染症	性器ヘルペス	尖形コンジローム	トリコモナス				
男		医療関係者(8)	0 0.0%	1 12.5%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0	0	1	
		その他の職業(46)	1 2.2%	0 0.0%	1 2.2%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0	0	2
女		医療関係者(39)	0 0.0%	0 0.0%	1 2.6%	2 5.1%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0	0	3
		その他の職業(128)	1 0.8%	1 0.8%	3 2.3%	0 0.0%	0 0.0%	3 2.3%	0 0.0%	1	1	9
男		医療関係者(9)	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0	0	0
		その他の職業(19)	0 0.0%	0 0.0%	2 10.5%	1 5.3%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0	0	3
40歳以上	女	医療関係者(36)	0 0.0%	0 0.0%	1 2.8%	0 0.0%	0 0.0%	3 8.3%	0	0	4	
		その他の職業(115)	0 0.0%	0 0.0%	2 1.7%	0 0.0%	0 0.0%	7 6.1%	0	0	9	

<3> 性感染症について、次のことで正しいと思われるものに○をつけてください(複数回答)

39歳以下	男	医療関係者(8)	a. 今流行している性感染症は、あまり症状が出ないものが多い。		c. 上記<1>に書いたような性感染症にかかっていると、エイズに3倍も4倍もかかりやすい。		d. 子宮頸癌も、性感染症であるヒト乳頭腫ウイルス感染と極めて深い関係がある。		e. クラミジア感染症が若い女性の間に大流行している。		f. クラミジア感染症には性生活をしている人は誰がかわかってもおかしくない。		g. クラミジア感染症になると不妊症や流・早産になりやすい。		合計
			7	7	6	4	7	7	7	7	7	7	7		
39歳以下	男	医療関係者(8)	87.5%	87.5%	75.0%	50.0%	87.5%	87.5%	87.5%	87.5%	87.5%	87.5%	87.5%	87.5%	45
		その他の職業(46)	35	40	39	26	41	35	40	35	40	35	40	40	256
	女	医療関係者(39)	36	37	36	34	37	34	37	34	37	34	37	37	251
		その他の職業(128)	98	113	101	80	117	80	117	103	107	103	107	107	719
40歳以上	男	医療関係者(9)	7	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	61
		その他の職業(19)	16	16	17	12	19	15	19	15	19	15	19	19	114
	女	医療関係者(36)	29	35	27	26	32	26	32	28	34	28	34	34	211
		その他の職業(115)	86	95	70	67	94	67	94	86	84	86	84	84	582
			74.8%	82.6%	60.9%	58.3%	81.7%	74.8%	81.7%	74.8%	81.7%	74.8%	73.0%		

<4>コンドームは何のため使いますか

		a. 避妊のため		b. 性感染症予防のため		c. 両方のため		計	
39歳以下	男	0	0.0%	1	12.5%	7	87.5%	8	100.0%
		12	26.1%	0	0.0%	34	73.9%	46	100.0%
	女	2	5.1%	1	2.6%	36	92.3%	39	100.0%
		12	9.4%	2	1.6%	114	89.1%	128	100.0%
40歳以上	男	0	0.0%	0	0.0%	9	100.0%	9	100.0%
		2	11.1%	0	0.0%	16	88.9%	18	100.0%
	女	2	6.5%	0	0.0%	29	93.5%	31	100.0%
		4	3.6%	3	2.7%	105	93.8%	112	100.0%

<5>コンドームの使い方

		いつも	時々	使っていない	計	その他	NA	合計	
a. 決まったパートナーの時は、	39歳以下	医療関係者	4	0	0	4	0	4	8
		関係者	100.0%	0.0%	0.0%	100.0%			
		その他	19	14	8	41	0	5	46
		の職業	46.3%	34.1%	19.5%	100.0%			
		医療関係者	20	10	6	36	0	3	39
	関係者	55.6%	27.8%	16.7%	100.0%				
	その他	64	24	17	105	1	22	128	
	の職業	61.0%	22.9%	16.2%	100.0%				
	医療関係者	2	3	2	7	0	2	9	
	関係者	28.6%	42.9%	28.6%	100.0%				
その他	6	5	4	15	0	4	19		
の職業	40.0%	33.3%	26.7%	100.0%					
40歳以上	医療関係者	9	8	9	26	0	10	36	
	関係者	34.6%	30.8%	34.6%	100.0%				
	その他	42	29	14	85	1	29	115	
	の職業	49.4%	34.1%	16.5%	100.0%				
	医療関係者	4	1	0	5	0	3	8	
関係者	80.0%	20.0%	0.0%	100.0%					
その他	18	5	1	24	0	22	46		
の職業	75.0%	20.8%	4.2%	100.0%					
b. 不特定のパートナーの時は、	39歳以下	医療関係者	15	0	0	15	0	24	39
		関係者	100.0%	0.0%	0.0%	100.0%			
		その他	41	6	4	51	2	75	128
		の職業	80.4%	11.8%	7.8%	100.0%			
		医療関係者	3	1	0	4	0	5	9
	関係者	75.0%	25.0%	0.0%	100.0%				
	その他	6	2	0	8	0	11	19	
	の職業	75.0%	25.0%	0.0%	100.0%				
	医療関係者	5	0	2	7	0	29	36	
	関係者	71.4%	0.0%	28.6%	100.0%				
その他	21	0	2	23	1	91	115		
の職業	91.3%	0.0%	8.7%	100.0%					

<6>コンドームを使う場合、性交渉のどの時点から使っていますか。

	a. 始めから (口の時から)		b. 始めから (性器接触から)		c. 射精直前に	その他	計	NA	合計					
	1	14.3%	3	42.9%										
39歳以下	男	医療関係者	1	14.3%	3	42.9%	0	0.0%	7	100.0%	1	8		
		その他の職業	2	4.9%	36	87.8%	3	7.3%	0	0.0%	41	100.0%	5	46
	女	医療関係者	9	28.1%	19	59.4%	4	12.5%	0	0.0%	32	100.0%	7	39
		その他の職業	14	13.2%	80	75.5%	11	10.4%	1	0.9%	106	100.0%	22	128
40歳以上	男	医療関係者	3	42.9%	4	57.1%	0	0.0%	0	0.0%	7	100.0%	2	9
		その他の職業	5	33.3%	8	53.3%	2	13.3%	0	0.0%	15	100.0%	4	19
	女	医療関係者	6	25.0%	14	58.3%	4	16.7%	0	0.0%	24	100.0%	12	36
		その他の職業	8	9.8%	48	58.5%	26	31.7%	0	0.0%	82	100.0%	33	115

高校生性経験率 (北海道調査:2000~2001年度)

